『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』5（2002）：154-162

「ティルワル」 – イテリメンの英雄伝説

訳・解説　小野　智香子

「ティルワル」はイテリメン族の間に伝わる「最も強い男」の伝説である。*Сказки и мифи народов Чукотки и Камчатки* (Москва, 1974)（『チュコトカとカムチャツカの民族の民話と神話』）にもいくつかの伝承が記録されているが[1]、内容はだいたい次のようである。ティルワルはとにかく歩くのが速く、桁外れで人間離れした力の持ち主として知られる。そしてその噂を聞きつけた力自慢の男達がティルワルに勝負を挑むが、ティルワルの力には遠く及ばず、戦うことなく逃げたり、殺されたりしてしまう。ティルワルには美しい妹がいたが、彼女はコリャークの男と恋に落ちてしまい、兄の言うことを聞かずにコリャークのもとに行ってしまう。ティルワルは激怒し、妹を無理矢理連れ戻し、コリャークを殺してしまう。

今回ここで御紹介するのは、2001年9月にチギリ村で記録したものである。語り手は L. E. プラウドシナ氏（1938年生まれ、セダンカ・オセードラヤ村出身のイテリメン女性）である。彼女は子供の頃、夜母親に寝かしつけられる時に、「早く寝なさい、ティルワルが来るよ」と言われ、ティルワルって誰だろうといつも考えていたそうである。彼についての伝説を読み、また実際に何人ものイテリメンやコリャークの人々にティルワルについての話を聞いたということだ。なお、上述の *Сказки...*などの文献では Тылвал という記述が一般的だが、プラウドシナ氏は [ɸtəlwal] と発音している。

---

[1] *Сказки и мифи народов Чукотки и Камчатки* (Москва, 1974), pp. 497-505.

「ティルワル」

語り手：T. E. プラウドシナ

2001年9月12日～9月14日　チギリ村

いつの頃だったろうか、人々はとても強かった。すべての物を手で作り、足で歩いた。ここにティルワルは生まれた。そこはセダンカ・オセードラヤ村[2]だった。今では、この伝説を語る時、人々は「これは真実ではない、ティルワルなどいなかった」と言う。

彼の母はハイリューゾヴォ村[3]の出身だった。ティルワルは生まれた時小さかったが、とても強かった。育つのが早く、外で遊び、とても走るのが早かった。彼らは初め、丸い山の上に住んでいた。朝起きると、母はやかんを火にかけた。まだそのお茶が沸かないうちに、ティルワルは山の周りを走り回って来た[4]。

ティルワルが４つの時、母は彼の妹を産んだ。彼の父は猟に出かけていた。ティルワルはまだ小さかったが、すでに父の後を追いかけていた。父がカモやウサギを殺すと、ティルワルはそれらを腰に結び付けて、疲れることなく家まで運んだ。すでに狩猟に出かけるのがとても上手になり、薪を運んだり、トナカイを捕りに出かけたりした。

そのうち父はひどい病気になった。当時セダンカ村の人がみな病気になっていた。母は彼に言った。

「お父さんはひどい病気だ。おまえが森へ行って、カモを捕って来てくれたらねえ。」

母はさらに言った。

「お父さんはスープを飲みたがっているよ。」

ティルワルは森に行った。カモを捕まえ、それらを腰に結び付けて家に帰った。彼は母に言った。

「たくさんのカモを持って来たよ。」

腰の所を見ると、カモの頭しか残っていなかった。全部落ちていたのだ。実はティルワルがとても速く歩いたので、その速さのためにカモは全部落ちてしまったのだが、どうやって落ちたのか、彼は気付かなかった。そしてカモの頭だけが残った。父は彼に言った。

「セダンカの人々はみな病んでいて、食べ物を欲しがっている。森に行って熊を捕まえなさい。そしてセダンカに持って帰って、彼らにあげなさい。」

---

[2] c. Седанка-Осседлая. かつてイテリメン族が居住していた村。北部方言の話者が居住していた。
[3] c. Хайрюзово. イテリメン族の村。
[4] そのため、彼らの住んでいた山は「丸い山」(Круглая сопка)と呼ばれるという。

ティルワルは森に出かけ、２頭の熊を捕まえた。セダンカに運び、友人たちにあげた。友人たちはとても喜んで、これらの熊をもらった。彼らはティルワルに尋ねた。

「おまえの父、母、妹は元気か？」

ティルワルはとても遠くを歩いた。いつも雪が解けることのない山々を歩いた。そこでユキヒツジを殺し、家に持って来た。トナカイを殺して肩にのせ、薪を持ち、すべてを家に運んだ。ある日、森を歩いていた時、とても天気が良かった。ティルワルはとてもいい気分で、ある山に辿り着いた。そこに留り、テーブルのような山を見た。２つの小さな山はまるで椅子のようだった。ティルワルはしばしそこに立ち、テーブルと２つの椅子が立っているのを見ていた。そこのどこかにとても大きな、卵のような石があった。ティルワルはその石を手に取り、卵のように山の上に置いた[5]。

すでに彼の父は亡くなり、ティルワルは母と妹とともに残された。ティルワルはもう大きく成長していた。彼は母に言った。

「ここから出て行って、どこか別の場所を見つけよう。」

母は彼に言った。

「おまえにはおまえの考えがある。自分で見つけなさい。」

ティルワルは森へ行き、別の住む場所を探した。母の所へ来て、言った。

「ほら、あそこに小さな山がある。あそこに引っ越そう。」

小さな山の頂上はとても鋭く尖っていた。ティルワルはそこに着くと、小さな山の頂上を踏みつけた。何度も何度も踏みつけた。彼らはこの小さな山の上に家を作った。ティルワルは冬になると、誰も近付かないように、この小さな山によく水をかけた。いつの頃か、セダンカではイテリメンの人々がひどく病んでいた。おそらくなにかのウイルスがあったのだろう。そのためティルワルは母と妹を連れてそこから出て行ったのだ。

この小さな山の上で、彼らは幸せに暮らした。ティルワルはとても遠くへ猟に出かけた。河口や海へ出かけて、そこから薪やアザラシを持って来た。ティルワルはいつも河口に薪を取りに行った。薪は海によって海岸に運ばれて来るのだ。ティルワルはそれを集めて家に運んだ。母が家で料理をする間、彼は素早く河口に行った。彼は言った。

「河口に行って、薪を持って来るよ。」

ティルワルはすでにとても大きくなっていた。イテリメンの人々はみな、彼がどんなに強いかを知っていた。

---

[5] この山は「テーブル山」(Столовая сопка)と呼ばれる。

船がこの地に着いた。ある時、とある水夫は、ティルワルという者がとても強いということを聞いた。彼は他の水夫たちに言った。

「俺はとても強い。出かけていって、ティルワルを見つけてやる。」

ティルワルは海にいて、薪を集めていた。水夫は彼に近づいて尋ねた。

「おまえはティルワルを知っているか？」

ティルワルは尋ねた。

「なぜおまえにティルワルが必要なのか？」

水夫は言った。

「俺はとても強い。ティルワルもすごく強いと聞く。俺は彼を見たいんだ。」

ティルワルは言った。

「行こう。彼のことは知っている。」

ティルワルは薪を持って先に歩いた。水夫は後についていたが、どんどん遅れていった。ティルワルは彼に言った。

「なんでおまえは遅れるんだ？」

水夫は言った。

「おまえは歩くのが速すぎる。」

ティルワルは言った。

「まだこれから戦いたいんだろう？」

すでに水夫は大きく遅れていた。ティルワルは彼の髪を前に引っ張った。ティルワルは水夫の髪だけを持って引きずった。こうして水夫は死んだ。戦うことはなかった。

この船の人々は言った。

「どこぞのコリャークが我々の水夫を殺した。」

ティルワルの所へ、パラナ[6]から強い人々がやって来た。彼らが来た時、ティルワルは河口にいた。彼らは来て、ユルタの中に女と子供がいるのを見た。彼らは尋ねた。

「ここにティルワルは住んでいるか？」

女は答えた。

「ここに住んでいます。」

「彼はいったいどこにいるんだ？」

---

[6] п. Палана. コリャーク自治管区の中心地。

「河口に出かけました。もうすぐ帰って来ます。」

人々は家に入って座った。女は言った。

「食事をどうぞ」

人々は言った。

「我々はティルワルを待つ。」

彼らは話をしたり聞いたりしていた。ティルワルは薪をほうり投げ、2頭の生きた熊を運んで来て、木に結び付けた。この人々はティルワルを見て、なんだこんなに小さいじゃないか、と思った。強いティルワルは人々を見て、言った。

「食事をしよう。」

彼らは言った。

「我々は戦いたいのだ。しかしおまえはこんなに小さかったんだな。」

ティルワルは言った。

「俺は小さい。だからほら、あそこにいる熊を殺してよ。」

人々は言った。

「なに、熊だと？ 恐ろしい！」

ティルワルは2頭の熊を殺した。このパラナの人々はびっくりして、立ち去ろうとした。ティルワルは言った。

「どこへ急いでいるんだ？」

この人々は戦うことなく去っていった。

ティルワルはセダンカへ行き、友人たちに会った。そこからチギリ[7]に来た。皆ティルワルを喜んで迎えた。ティルワルは手ぶらで訪れることはなく、いつも何かを持って来た。ある日、小さい山の上の彼の所に、チギリから彼の友人がやって来た。ティルワルは彼に石でできた灯明台をあげた。

ティルワルは、よその人間が我々イテリメンやコリャークの人々からクロテンやキツネを奪っていることを知った時、この人間たちに対してひどく腹を立て、イテリメンの人々に言った。

「何も与える必要はない。」

ここに来たこの人間たちは、我々イテリメンからたくさん奪ってきた。だからティルワルはこの人間たちにひどく腹をたてていた。

この人間たちはとてもティルワルに会いたがっていた。彼らは、ティルワルがとても背が高くて

---

[7] c. Тигиль. 近隣の村。コリャーク自治管区チギリ地区の中心地。

恐ろしい人間だと思っていた。ティルワルは背が小さく、髪が長かった。眉は黒く、鼻も口もまっすぐで、唇は薄かった。緑色の目をした美しい顔立ちで、いつも微笑んでいるようだった。腕はとても強靭で、体はダケカンバ[8]のようだった。彼らはティルワルの所に、小さな山の上に行くのをやめた。彼がどんなに強いかを知ったのだ。

今度は母が病気になった。妹はすでに大きくなり、彼らは母の世話をした。ある日、母は死んだ。ティルワルは母が死んだのを見て、この小さな山の上に穴を掘り、そこへ母を埋めた。ティルワルは妹に言った。

「母は死んだ。これからは俺たち二人で暮らしていく。俺はおまえの母となり、父となり、兄となろう。」

ティルワルは非常に良く妹の世話をした。妹は成長し、すでに兄と同様大きく、美しくなった。長い髪をとても美しく編んでいた。彼の妹もまた森に出かけ、ベリーや根、ユリ根を集めた。彼女は小さな山の反対側を歩いた。そのそばにはトナカイを放牧しているコリャークたちが住んでいた。ある日、妹は山のあちら側に行った。妹は森を歩く時、いつも歌を歌っていた。そこでトナカイの世話をしていたコリャークたちには、ティルワルの妹がどのように歌っているかが聞こえた。彼らはみなティルワルとその妹を知っていた。コリャークたちはティルワルを恐れていた。

そのコリャークたちの所に、コリャークの若者がいた。ある日彼は、ティルワルの妹が歌っているのが聞こえて、見に行った。これは誰だろう？長い髪を編んだこの美しい娘を見た時、コリャークの若者はすぐにこの娘に恋をした。この若者は今や、ティルワルの妹が歌っているのをいつでも聞きたくなった。この娘は、彼女の歌声を聞きたがっているコリャークの若者のことをまだ知らなかった。この若者は考えた。どうやって彼女に近づこうか？

ある日、娘は再びあちら側に出かけて歌いはじめた。それを聞いた若者は近づいて行き、彼もまた歌いはじめた。娘はそれを聞いて驚いた。若者は言った。

「怖がらないで。僕は君をずっと前から見ている。でも君に近づくのが怖かったんだ。君のお兄さんはとても強いと聞いている。彼は君をどこにも放さないとね。」

娘はコリャークの若者が歌うのが聞こえた。そして立ちすくんで聴いた。彼女もすぐに彼に恋をした。

今では、彼らはいつもその場所へ行くようになった。若者は言った。

「今、君が歌うのが聞こえる。すぐに行くよ。」

---

8 Каменная береза. カバノキ科カバノキ属の樹木。

彼らは互いになんという名であるかを知った。娘は言った。

「私の名前はシナウェト。」

若者は言った。

「僕はポット。」

彼らはとても愛し合っていた。ティルワルは、誰が妹の所に来ているか知らなかった。ティルワルが海から戻った時、妹はいつも山々のどこかを歩いている。妹が家に戻った時、ティルワルは尋ねた。

「おまえはどこにいたのか？ずいぶん長い間そこにいたな。」

妹は言った。

「私は山の向こう側へ行っているの。そこは川がとてもきれいだし、とてもいい気分になって、歌っているの。」

ティルワルは言った。

「反対はしないよ。行きなさい。我々の山の森、草地を知るがいい。ただし長く歩いてはだめだ。おまえは女の子なのだから。」

ティルワルは自分の仕事をした。妹は大急ぎで家の仕事をすませると、すぐに向こう側へ走っていった。そこへ着くと、すでに若者が待っている。娘が着くと、彼ら二人はとても喜んだ。彼らはすでにとても愛し合っていた。時間など考えていなかった。彼らはそこで会うと、長いことそこにいた。若者はティルワルを恐れなくなった。

ある日、ティルワルが家に帰ってくると、妹は家にいなかった。向こう側に行ってみると、自分の妹がコリャークの若者と抱き合ってキスしていた。ティルワルはとても怒った。近づいて行き、妹を家に連れ戻した。コリャークの若者の髪をつかんで上に引っ張り上げた。家に戻って妹に言った。

「なぜこのコリャークの若者と会っているんだ？」

妹は言った。

「私たちは愛し合っているの。」

ティルワルは言った。

「俺がおまえにふさわしいイテリメンの若者を見つけてやる。」

妹は彼に言った。

「私たちはとても愛し合っているの。私のために誰も探す必要なんてない。」

ティルワルは言った。

「いや、おまえをコリャークの所には嫁にやらん。」

妹は言った。

「まさか兄さんは愛がどういうことか知らないの？私は他の人を愛することはできない。死んだ方がまし。」

ティルワルは海に薪を取りに行った。妹はあちら側へ逃げて行った。若者はすでに彼女を待っていたが、娘は来ないだろうと思っている。彼は彼女を見て、とても喜んだ。彼女を抱きしめ、何度もキスをした。彼は彼女に言った。

「ここから逃げよう。」

シナウェトは言った。

「もう少し待ちましょう。」

ティルワルは急いで戻って来たが、また妹はいなかった。薪を投げ出し、再び向こう側へ行った。ティルワルは妹を見ると、彼女の所へ近づき、あっという間に家に運び去った。コリャークの若者の髪をつかみ、コリャークたちが住む家に引きずって行った。そこに彼を置いて、言った。

「もう彼女の所に行くな。おまえには妹を嫁にやらん。」

トナカイを放牧していたコリャークたちはみな、コリャークの若者とイテリメンの娘の恋のことを知っていた。コリャークたちはこの若者に言った。

「もうあそこへ行くのはやめろ。ティルワルは自分の妹をおまえに嫁にやりたくないんだ。彼はあんなに強いし、おまえは殺されるぞ。そして彼は我々を憎むだろう。」

若者は言った。

「僕たちは互いなしでは生きていけない。ティルワルなんか怖くない。殺すがいいさ。僕は彼の妹をとても愛しているんだ。」

コリャークたちは言った。

「おまえの好きにしろ。」

ある日ティルワルが家に戻ると、また妹は向こう側へ逃げていた。ティルワルは激怒した。そこへ行き、再び彼らが一緒にいるのを見た。彼は妹を家に連れ戻した。そして若者の髪をつかんでコリャークたちが住む場所へ引きずっていき、そこでこの若者を殺した。その家にいたコリャークたちをすべて殺した。コリャークたちはティルワルに激怒し、彼を殺そうと思った。彼らはティルワルの山に向かう準備をした。そこに着くと、彼らは自分達の姿が見えないように仮装した。コリャ

ークたちが近くまで来た時、ティルワルは誰かが来るのに気づいた。すぐに自分の弓を手に取り、コリャークたちに矢を放って撃ち殺した。このコリャークたちはアイプラ[9]から来ていた。別のコリャークたちは、ティルワルがコリャークたちを殺していることを聞いて、言った。

「我々が彼を殺す。」

彼らもまた、周到にティルワルを殺す準備をした。ティルワルはコリャークたちが自分を殺したがっていることを聞き、彼も矢を用意した。ところが彼が眠ってしまうと、妹は全部の矢に切り口を入れた。そして撃ち合いが始まった時、矢は全部壊れてしまった。ティルワルはこれが妹の仕業と分かって激怒し、素手でコリャークたちを殺しに行った。コリャーク全員を殺し、2頭のトナカイを取って家に帰った。そして妹に言った。

「おまえは俺の言うことを聞こうとしなかった。もう俺はおまえを嫁にやるぞ。」

彼はトナカイと妹を連れてハイリューゾヴォへ行き、そこに彼女を残して嫁がせた。彼は彼女に2頭のトナカイを置いて、そこから再び自分の山へと去って行った。彼がそこに到着し、母の眠っている山を見ると、少しの間そこに座った。そして山からチギリの方に滑り降りた。彼が滑り降りた所には2本の跡が残った。長い間その跡は見えていて、皆がそれを見た。

山から滑り降りると、ティルワルはそこからボリシェレツク地方[10]へ行った。そこでは翌日の戦いに備えて周到に準備していた。そこにはたくさんのコサックが来ていた。ティルワルはある小屋に着いた。そこで彼は大変歓迎された。皆が叫んだ。

「ティルワルが来た！ティルワルが来た！」

ティルワルは到着すると、カナチという名の強い若者の手を取って言った。

「この若者が私の後継者である。」

朝起きると、全員でコサックを殺しに出かけた。ティルワルは非常によく戦った。彼はすでにたくさんのコサックを殺した。しかし一人のコサックが川に逃げ込み、丸木舟から銃を取ってそこからティルワルを撃った。弾は額に当たった。生き残っていたコサックたちはみな丸木舟に乗って逃げた。ただカナチだけが、ティルワルが殺された場所に長い間座って、泣いていた。

（おの　ちかこ・千葉大学社会文化科学研究科）

---

9 Айпра. コリャーク族が住んでいた場所の名前。

10 Большерецкий район. カムチャツカ南西部の地方